

## ピロリ菌が大腸がんのリスクを増大させる可能性

これまでの研究において、胃がんの主要な原因であるピロリ菌と大腸がんとの関連が示されている。しかしながら、結果は一貫しておらず、人種の違いやピロリ菌が作り出す毒性因子 VacA が関わっている可能性が指摘されている。本研究では、大規模で多様な集団を対象にコホート研究を実施し、ピロリ菌抗体と大腸がんとの関連について検討した。

米国の大腸がん患者 4,063 例およびマッチさせた大腸がんのない 4,063 例（対照群）を対象に血液サンプルを分析した。その結果、大腸がん患者群では 41%、対照群では 40%がピロリ菌を保有していた。また、VacA 陽性ピロリ菌の保有で大腸がんリスクが 11%増大したが、この関連はアフリカ系アメリカ人でとくに強かった（オッズ比 1.45）。さらに、VacA 抗体レベルが上昇するほど大腸がんリスクは高くなり（ $P=0.008$ ）、とくにアフリカ系アメリカ人で顕著であった（ $P=0.07$ ）。

したがって、ピロリ菌タンパク質の 1 つである VacA は、大腸がん発症率上昇との関連性が最も強く、特に、このタンパク質に対する抗体量とアフリカ系アメリカ人の大腸がん発症に関連がみられた。ピロリ菌抗体が大腸がんリスクのマーカーとして機能するのか、さらなる研究が必要である。

出典：Gastroenterology. 2018 Oct 05; pii: S0016-5085(18)35088-1.